

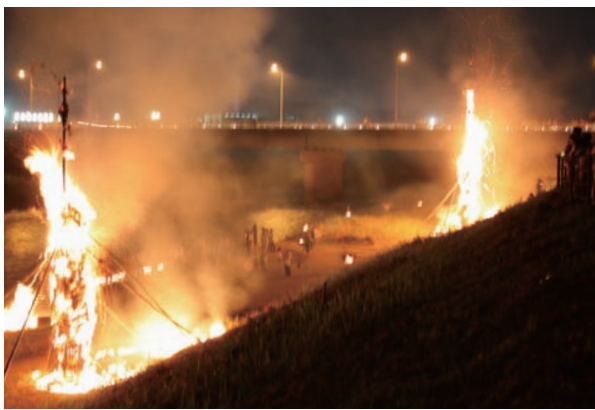
ブラジルでの活動を語る



国際協力機構（JICA）が派遣する日系社会青年ボランティアとして、平成 19 年 7 月からブラジル・サンパウロ州インディアトゥーバ市の日本語学校で、子どもたちに日本語や日本文化を教える活動を行ってきた関市出身の林那奈美さん（下之保）が、

2 年間の活動を終えて日本に帰国し、市役所を訪れて尾藤市長に帰国の報告をしました。林さんは、ブラジルでの活動や生活について「周りの人がとても親切にしてくれて、大変励みになりました」と話していました。

あんな事、こんな事



巨大な炎で精霊送り

8 月 15 日、小屋名の津保川河畔で、お盆の送り火の伝統行事「チンチカカ」が行われました。夕刻になると、たいまつなどを手にした地元住民が、太鼓や鐘の音とともに河原まで練り歩き、高さ 10 ㍍を超す大たいまつに火がつけられると豪快に燃え上がって周囲を真っ赤に染めました。また、対岸では「2009 チンチカカ川、海を美しく」の火文字も現れ、来年開催される全国豊かな海づくり大会の成功を祈りました。

大人に負けない踊りのうまさ

8 月 15 日、関盆おどり保存会主催による毎年恒例の「子供おどりコンクール」が本町で開催され、市内外から集まった約 100 人の子どもたちが盆踊りの腕前を競いました。浴衣姿の子どもたちは入賞目指して課題の曲を軽快に踊っていました。審査の後は、大人も輪の中に入って「かわさき」や「春駒」などを踊り、夏の夜のひとときを楽しみました。





ろうそくに願いを込めて

8月17日夜、下之保の高澤観音で、先祖供養や家内安全を願う「千灯供養」が行われました。ろうそくには、県内外の信者らが般若心経を写経し願い事と氏名を書いた紙が巻かれ、お経が唱えられる中、約20社四方の卍型に並べられた560本のろうそくに火がともされ、高台から眺めている見物客らは幻想的に照らされた炎を静かに見入っていました。

全国から集まった剣士と稽古

8月14日、15日の2日間、わかさ・プラザ「総合体育館」で関商工高校剣道部、同部父母の会主催のわかさ高校剣道錬成大会が行われ、県内外から64校、約800人が参加しました。県内随一の規模となるこの錬成大会では、3年生の引退後の新チームが4チームによるリーグ戦を6回実施し、体育館には選手たちの気合いのこもった声と竹刀の音が響き渡っていました。



関市再発見

魅力あふれる関市を市民の皆さんに訪ねてもらおうと、市政見学バスを運行しました。今回は2つのコースを企画し、武芸川・洞戸・板取方面と市街地を見学しました。市街地見学コースで「鶴の家 足立」に立ち寄った見学者らは、足立陽一郎鶴匠の説明を聞きながら、小瀬鶴飼で活躍する鶴を間近で見ることができ、大変満足そうでした。

絵巻物式「桃紅えほん」

篠田桃紅美術空間で開催中の夏休み子ども企画展の関連イベントとして、こどもワークショップが行われました。作品鑑賞の後、桃紅作品に描かれた四角や線を主人公に、和紙に墨や朱、金泥、銀泥などを使って自由に描き、でき上がったいくつかの作品を並べ、それらをつなぐようなお話を作って完成。長さ3.5社ほどの自分だけの絵巻物ができ上がりました。



こぼれ話



表紙は高校生の就業体験の様子です。今年で3年目を迎える刃物業界での就業体験は、後継者不足などの課題を抱える地場産業の重要な事業として、毎年ナイフ作家の原幸治さんが指導を引き受けていらっしゃいます。今年は4人の関有知高校の生徒と中濃特別支援学校の生徒1人が参加しました。生徒たちがものも言わずナイフ作りの作業に没頭している様子や時折見せる笑顔を見てると、モノづくりが本来持ち合わせている魅力や奥深さを強く

感じました。それと取材中に感じたことですが、指導にあたる原さんが作業中に生徒たちに掛ける言葉がとても印象的でした。「自由にやってみなさい。その代わりに自分の仕事には責任を持つこと」「失敗は成功の母。失敗しないといいモノはできないぞ」「イメージと感覚を大切に」市役所に入って15年になる私にとって胸にグサとくる言葉ばかりが原さんの口から飛び出てきます。働くことの原点に立ち返った瞬間であり、とても心に残りました。